日江井榮二郎氏ロングインタビュー 第1回：少年時代〜中学時代

高 橋 慶 太 郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部　〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

今月より，日江井榮二郎氏のインタビューを連載いたします．日江井氏は東京大学天文学教室にて萩原雄祐氏，鏑木政岐氏，藤田良雄氏の薫陶を受け，大学院修了後には東京天文台に職を得て，末元善三郎氏とアインシュテイン塔望遠鏡で太陽フレアの観測・研究を行いました．その後，乗鞍コロナ観測所の所長を務め，太陽観測衛星「ようこう」をリードするなど，日本の太陽研究を強力に推進してきました．国立天文台を退職した後は明星大学に勤めて天文学教育に従事し，学長にも就任しました．また日江井氏はこれまで数十年にわたり数多くの日食を観測してきており，ご本人曰く「日食病」（日食の魅力に取り憑かれること）にかかっておられるということです．今回は中学生までのお話で，中学生のときに東京大空襲に遭い敗戦を迎えた体験を話していただきます．中学生の多感な時期に，これらの経験はその後天文学者になる少年にどのような影響を及ぼしたのでしょうか．

日江井榮二郎氏略歴

1931　東京都生まれ
1953　東京大学理学部物理学科天文学専攻　卒業
1955　東京大学大学院数物研究科修士課程　修了
　　東京大学東京天文台　助手
1965　東京大学東京天文台　助教授
1979　東京大学東京天文台　教授
1982　東京天文台乗鞍コロナ観測所　所長
1992　国立天文台　停年退職
　　明星大学　教授
1998　明星大学　学長
2002　明星大学　定年退職
2022　瑞宝中綬章　受章

日江井榮二郎氏近影（2024年3月撮影）．

●少年時代

高橋：インタビューをお引き受けいただき，どうもありがとうございます．よろしくお願いします．では子供の頃のお話から始めさせてください．先生は昭和6年，東京生まれということですね．東京のどのあたりですか？

日江井：下町ですよね．江東区ですからね．私が生まれた昭和6年っていうのは，昭和5年辺りから不況があり，満州事変があり，その後2・26事件があったり，それから海軍の軍縮条約破棄があった．そしてシナ事変になり，大東亜戦争に入って，敗戦となった．その前後を生きてたわけです．

高橋：大変な時期を少年時代として過ごしたわけですよね．先生のおうちはどういうおうちだったんですか？

日江井：父が布を扱う仕事をしてました．今回あなたからインタビューを受けるということでね，わが一生を考えるのにちょうどいいかなと思ってね，振り返ってみたいと思ったんですよね．ちょうど天文屋が宇宙の起源はいつごろかと思うのと同じようにね，自分の始まりはどこまで記憶が辿れるかなぁと思いまして．私は妹が生まれたのを覚えてるんです．うちの中，あの当時はお産婆さんが来てうちの中が急に騒がしくなった．そのとき私が3歳．だから3歳の記憶が最初です．

3歳のとき，お祭りにて（日江井氏提供）．

高橋：じゃあ妹さんがお生まれになったのを覚えてらっしゃって．

日江井：それは記憶であって，それから幼稚園へ行って小学校へ行ったわけですよね．

高橋：幼稚園は地元の幼稚園に行ったんですか？

日江井：6歳上の姉と，3歳上の兄が地元の幼稚園に行ったから，親としてもそこの幼稚園に頼んでくれたわけです．でも私，1日で帰ってきちゃった．もう嫌だよと．

高橋：そうなんですか．

日江井：幼稚園では女の子と一緒に，チッチッパッパって遊戯するわけですよ．それが嫌いでね．つまりそうやって女の子と一緒に遊ぶデリカシーがなかったのかもしれない．それよりも近くのガキ大将，ガキ大将っていうのが結構よくみんなの面倒を見てくれたんですよ．ザリガニを獲るエサは何をどう釣り紐に付けるかとか，ベーゴマはバケツに夏の座布団を置いてそれを凹面にへこましてするだとか，崖のぼりの遊びをしに市川に行くんですが，省線にはこうやって切符買って乗るんだとか，そういう遊び方を教えてくれた．省線って今のJRですが．そういう体を動かす遊びが好きだったんでしょうねえ．だからお祭りがあれば山車を引いてみたり，相撲をしたり，それからベーゴマをしたり，そういう遊びばっかりやってましたね．それでまあ幼稚園を辞めちゃった．

高橋：あっ，じゃあもう幼稚園に行かずに？

日江井：行かずに．全然行かない（笑）．

高橋：親は何も言わなかったんですか？

日江井：あの当時の親は怖いですからね，体罰なんてのは当たり前にありましたからね．だけど何にもいわれなかった．あいつには向いてないんだと思ったんでしょうね．よかったですよ．

高橋：へえ〜，じゃあ幼稚園に行かずに小学校に行くということなんですね．

日江井：そうですね．昭和13年です．姉に連れられて小学校に行ったんですけどまずね，「ここで頭を下げるのです」って言うんですよ．見るとこんな祠みたいなのがありましてね，奉安殿ですよね．奉安殿は知ってる？

高橋：天皇陛下のですかね？

日江井：そうそう．御真影と，それから教育勅語が入ってるんですよね．どうして頭下げるのかなぁと思いましたけどもね．そうやってだんだんだんだん洗脳されたんでしょうね．それでまあ小学校はもう勉強もしないで遊んでばっかりいて，駆け足が速かったり相撲が好きだったりしてましたけれどもね．あっそう，字が下手なので，習字を習いに行かされました．2年生の頃です．4年生ごろにはそろばん塾に1年くらい行ったかなぁ．そこでは5つ玉を使ったそろばんをやってたんだけど，学校では4つ玉を使わせたわけですよ．

高橋：下の段に玉が4つあるか5つあるかっていうことですね．今はまあそもそもそろばんを使っている人はかなり少ないと思いますが，普通は4つ玉ですかね．

日江井：で，私は5つ玉を持ってるから要らないって言ったらね，じゃあ5つ玉の最後のところを動かないように紐で結わきなさいと学校で言われた．確かに一番下の玉を使わなくてもできるんですが，有ることによって計算しやすいんです．無駄しちゃいけないよって4つ玉が流行った．

高橋：そういうことなんですか．

日江井：今ずいぶん世の中がエフィシェンシーを追っかけてるけどね，ああここにもそういうのがあったかと．効率的に言えば4つ玉でいいじゃないかと言われたときに，いやあ5つ玉がいいんだよって言ったって人々は納得しない．5つ玉っていうのは老子がいってる無用の用．用はなさないんだけども，大事な用がある．その頃の小学校からそういうのがだんだんなくなって．でまあそのうちにそのそろばんの先生は出征したので行かなくなっちゃいました．

●太平洋戦争

日江井：それで小学校4年のときに太平洋戦争が始まったわけですよ．私よく覚えてるんだ，それは．寒い日でしてね．「臨時ニュースを申し上げます，臨時ニュースを申し上げます」って．

高橋：ラジオですか？

日江井：ラジオですね．それで「大本営陸海軍部，12月8日午前6時発表」って．「帝国陸海軍は，本8日未明，西太平洋においてアメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり」というわけですよ．非常に甲高い声でね，いやぁな響きだったですけどね．西太平洋ってどこかなぁってそのときチラッと思って，今でもよくわかりませんけど(笑)．それでその日学校に行く途中に勤めに行く人々の歩きを見てね，何となく，人々がせかせか歩いているように感じましたよね．まあ寒さもあるかもしれませんけど．それがその後酷いことになるというのは全然わかりませんでした．最初は軍艦マーチかなんかかけて，戦果華々しいことが報道されてね，そのうちにだんだん品物がなくなったね．あるとき，乾燥バナナというのが配られました．このくらい小さくてね，先生がこれは南のジャワの兵隊さんから送ってもらったんだとか言って．ずいぶん甘いなぁと思った．そういう甘いのがだんだん少なくなってですね，配給制度になって，だんだん世の中が灰色になっていきましたね．

高橋：バナナも配給なんですか？

日江井：学校でくれた．だから全員にくれたんじゃないですか．軍の配慮じゃないかなあ．1回だけでしたけどね．

高橋：中国との戦争はその前から始まっていましたけど，それはそんなに影響なかったですか？

日江井：シナ事変の最初くらいはそんなに影響なかったんですけど，小学校4年で大東亜戦争が始まってからだんだん世の中が暗くなってきて，欲しいものがだんだんなくなってきたという感じで

すので，小学校4年くらいからそういう戦争の影響を感じましたね．出征兵士だとか言って，みんなで送るわけですよね．近くの人で新婚早々でおなかに赤ちゃんがいるっていう人がいて，その奥さんはどういう気持ちだったのかなと思ってね．後から聞いたら，赤ちゃんは生まれたけどもご主人は戦死されたなんてね，そういうことが耳に入ってくるわけですよ．それから私の叔父が兵隊で中国に行ったんですが，弾に当たって，国府台の陸軍病院に入院したので見舞いに行ったりね．ああ戦争っていうのは酷いなぁなんていう記憶がありましたねえ．

高橋：だんだん身近にも戦争の影響が出てきたんですね．

日江井：ええあのね，私チョウチョを採るのが好きだったんですよ，小学校の頃．よく山奥っていうか渓谷のところへ行ってね，チョウチョを採ってたんですよ．それが小学校4年くらいまで続いた．ところがね，5年になったらもう行けなくなったんですね．それこそ「ぜいたくは敵だ」とかいってね．

高橋：「欲しがりません」とか？

日江井：「欲しがりません，勝つまでは」とかね，まさにそうだ．それから，「足りぬ足りぬは工夫が足りぬ」だったかね．そんなことを言ってだんだんやっぱり世の中が厳しくなっていくのを肌で感じましたね．それで山にも行けなくなっちゃいましたよね．チョウチョを採るのもできなくなっちゃった．だから小学校の後半なんてのは，なんかあんまりいい思い出はないですね．あぁ剣道がありました．剣道は好きでした．しかし，戦後は日本の武道教育が禁止されましたので，できなくなりました．

高橋：じゃあその小学生の頃，何か宇宙に興味を持ったとかいうのはなかったんですか？

日江井：そうですね，東日天文館っていうのがあったんですよ．

高橋：東日天文館？

小学校2年ごろ，法師温泉にて（日江井氏提供）．左から二番目が日江井氏．

日江井：うん．昭和12年の頃かな，大阪に日本で一番最初のプラネタリウムができたんです．その次の年，昭和13年だと思いますけど，東京の有楽町に毎日新聞の建物があって，その屋上にプラネタリウムができたんです．私は小学校の5年くらいにときに行ったんじゃないのかなぁ．有楽町に行っても，あのう何となく街の華やかさがなかったですよね．そこで1人でプラネタリウムを観たんです．ところがそこは東京空襲で焼けちゃったんです．

高橋：じゃあ星とか天文とかに興味があったってことなんですね？

日江井：はい．でも星のこと，星座のことを知ってるかというと知らないんですよ．プラネタリウムに行っていながらですね，星座のことはあんまり覚えてない．行ったので嫌いではなかったと思うんですけど．それでその後ですね，あれいつだろうなぁ，上野の科学博物館で広瀬（秀雄）先生が箒星を見つけたので表彰するっていうのを聞いて会場にでかけました．だから天文学会っていうのがあるのを何かで知ったんでしょうね．

高橋：広瀬さんっていうのは東京天文台の？

日江井：天文台の台長をやった方ですけどね．

高橋：なんか本を読んだりとかそういうのはありましたか？

日江井：本は野尻抱影さんの本をまあちらっと読

むくらいのもんだったんですけども，野尻抱影さんってやっぱりうまいですね，書き方が．天文には潜在的になんか惹かれるものがあったんでしょうけども，小学校の頃は星っていうよりもむしろチョウチョの方が好きだったわけです．

高橋：お家は商売をされてたということですけど，割と裕福な家庭だったんですか？

日江井：まあ裕福ではありませんが，よくはわかりませんけどもねえ，子供の頃年末には浅草の落語に連れて行ってくれて，こんな厚いトンカツをごちそうになって帰りはタクシーで帰ってきた．チョウチョを採るというのも，法師温泉というところに行ってたんです．電灯線もなくて夜はランプで明かりをとるというもうひなびたところに，夏中ずうっと行っててね．それでチョウチョを採って遊んでたりしてたんですね．だからまあある意味じゃそうは困ってなかったんでしょうね．

●中学進学

高橋：先生は小学校の後，江戸川中学というところに進学したわけですね．

日江井：はい，そうです．江戸川にあるからね．

高橋：それはお家の近くなんですか？

日江井：そうですね．国電（日本国有鉄道の電車）に乗って2つか3つ行ったところ．中学に入った年に私の姉が亡くなったんですが，結核だったんです．その当時まあ結核といえばほぼ亡くなると聞いていたんですが，ストレプトマイシンというのが特効薬だっていうのを耳にするんですよね．どうしてそういう情報が入ったのかわからないけど，それがイギリスにはあると．そしてそのイギリスと戦争をしてるっていうんで，そんな文明国と争っていいのかなぁと思ったんですね．結局姉は亡くなったんですけども，その姉が亡くなる前，私の中学入学祝いに，ラムが書いた子供向きのシェークスピアの本を丸善から買ってくれましてね．イギリスからの輸入本でしょうね．香りが漂って，コットンペーパーらしく軽いけれども立派な装丁で，何か外国を感じました．中学1年のときにそれを読んで，ああ英語で読むと訳本で読むの違って，英語のニュアンスがいいなと思いましたね．カルチャーショックでしたよね．

高橋：英語で読めたんですか？

日江井：辞書を引き引き読めたんだな，子供用に書いてくれた本だから読めたんですよね．その本は空襲で燃えてしまったので，後でアメリカに行ったとき探しましたけど見当たりませんでした．太陽磁場の観測をしていたHowardさん宅に呼ばれたときにそんな話をしたら，奥さんが「その本を持っている，あげる」と言って頂いたんです．それは文庫本並の小さな本で，探していた本とは違ったけれど，嬉しかったな．

高橋：そんなことがあったんですね．先生の頃は中学は義務教育ではなかったわけですよね．

日江井：そうそう，義務教育は小学校だけで，中学は義務教育じゃなかったですよね．

高橋：中学に行くというのは先生自身が希望したんですか？

日江井：なんか知らないけどまあ中学へ行くのが当たり前かなぁと思ってね．

高橋：やっぱり勉強がよくできてということですか？

日江井：ある程度できたからなんじゃないかなぁ．自分で行きたいとは言わなかったけれども，親から，というか学校の先生からかなぁ．まあこれくらいの成績なら中学行けるんじゃないかということじゃないかなぁ（笑）．覚えてません．

高橋：先生が中学に入ったのは1944年ですね．太平洋戦争も末期に近づいていた頃だと思いますが，中学ではやっぱり軍国的な教育っていうのがあったわけですか．

日江井：そうなんですよ．だって国全体がその方向に動いてたじゃないですか．

高橋：軍事教練もありましたか？

日江井：中学のときには軍事教練がありました．

配属将校っていうのがいて軍事教練をやるんです．三八式銃って明治38年にできた銃がもうなくて，木の銃をこう担がされて軍事教練やらされてね．クラスの誰かがへまをすると，全員がピンタをくらう．いやぁ厳しい訓練だったですね，それは．

高橋：中学に入った頃っていうのはもう負けそうだっていう頃ですよね．

日江井：そうです．本当に暗かったですよ．新聞に「ガダルカナル転進」と書いてあってね，子供心にね，「転進」っていうのはどういうことかなぁと，よく分からなかったですね．

高橋：「撤退」を「転進」に言い換えるというものですね．

日江井：だからだんだんその頃から暗くなって圧迫されてきた感じをうけました．だんだん食い物も少なくなって．そうそう，ゾルゲ事件だとかあったね．何となく世の中が怖くなりましたよね．「特高に聞かれると大変だよ」とか言ってね．そういう世の中だったな．

高橋：そうするとやっぱり将来自分は兵隊になるんだとか，そういう思いはあったんですか？

日江井：まあその年になれば，行けと言えば行かざるを得ないだろうという気持ちだったですね．あの頃，20歳になると徴兵検査が行われると聞いていたけどそれがだんだんだんだん19とか18になってね，国のためだよとかいってですね．

●東京大空襲

日江井：昭和20年の3月10日，中学1年のとき，実際は3月9日の夜中からですけれども，東京大空襲があった．約10万の人が亡くなったり負傷したりとかで100万の人が罹災しました．3月ですから，東京のあたりは北風ですよね．北の方からこう風が来るんですよ．その頃，家の庭に防空壕っていうのを作らされてね，空襲警報が鳴ったので，ゲートルを脚に巻いて，防空壕に避難しました．しばらくすると，今夜はもう爆弾投下はないから外に出て消火の準備をするようにと言われた．でも大火だから消火どころでなくて，もう逃げろって言うわけでね．

そのとき家には父と母と私がいたんです．父は徴兵されるには年を取ってたから兵隊には行ってなくて，町内の面倒を見ていました．それでまず私と母と2人で逃げたんです．避難訓練の通りに約10の家族が長いロープにつかまって，先頭にいる町内会役員の先導で近くの大通りに出ました．千葉街道（今の京葉道路）とそれと交差する天神通り（今の明治通り）の十字路で，もう大勢の人がねぇ，どこへ逃げたらいいのかわからずごったがえししてるんですよ．みんな食べ物とか衣服とか荷物を持ってね．そのうち大火が西北から迫ってきた．私たちはロープから離れてしまって町内の人ともはぐれちゃった．どうしたらいいか，どっちへ行っていいか分からない．上を見ると燃えている煙の中をB29の銀色の機体がサメのように悠々と動きまわっているのが見えました．

そのとき運よく父と会うことができたんです．父は「こっちへ行こう」って厳しい声で叫びました．こっちっていうのは西方向，風上なんです．風上から大火が迫って来るからみんなは風下の方に逃げる．風上に逃げたのは私たちともう1家族だけだった．結局，十字路でほかの3方向に逃げた人はかなりの人が亡くなったんです．私たちは風上に逃げた．後で考えれば風上っていうのはもう燃えた後だからね，それ以上燃えようがないっていうことなんですね．どうして父がそれを知ってたか聞きそこないましたけどね．

逃げる途中は大変ですよ．もう建物は非常によく燃えて炎が見える．大火事になると風が強く吹くんです．台風のようになってね，屋根瓦が飛んできました．屋根瓦が飛んできて，地面に落っこちてパーンと音を立てていたんです．あの頃僕らは防空頭巾を被ってたから，屋根瓦が頭に落っこってきても大丈夫かなと思った．そんなふうに屋根瓦が飛んでくる間をこう縫ってね．そうする

と途中で白い肌のひとがこううつ伏せに倒れているのが目に入ったんです．道路の真ん中でね．近づいて見ると若いお母さんなんですね．両手で下に赤ちゃんを抱いてるんですよ．その方はたぶん煙にまかれて倒れて亡くなったんでしょう．そこに火がぱーっとこうきて，火は風にあおられて道路をなめますからね．火がその方の衣類を焼いて，裸体に近い白い肌になった．中学1年生ながらね，なまめかしかったですね．そういうのをまたぎながら逃げたんですよ．

その逃げる先はですね，当時，避病院といってた墨東病院なんです．その傍は横十間川なんですね．そこへ行ったらもう大火事が風下へ行ったんでね，助かったんです，私は．だから確率4分の1で生きてるんじゃないかと思ってます．

さっきの十字路の北側には省線の駅があって，風下の東方向には精工舎のコンクリートの建物があったんです．コンクリートの建物は燃えないと思って多くの人が行ったんですが，みんな焼死したんですね．燃えない建物は安全という思いに駆られたんでしょう．でも実際は避難した人々が持っている荷物が燃えた．生き延びた人に聞くと，駅に入ろうとしたけど中の人からもう一杯だからダメと言われたと．それから十字路を南に行った人は，南からも火が迫ってきたから川に飛び込んで，多くの方が亡くなりました．

高橋：先生のご家族は十字路の風上の方向に逃げて助かった，ということなんですね．

日江井：十字路でね．今でも地震が起こると大都会では大火事が起こる恐れがありますよね．私は若い人みんなに「そのときは風上に逃げろ」って言ってるんです．風上に逃げるのは怖いけども，逃げられれば生き延びられますからね．

逃げたあとも大変でした．少し明るくなって，喉が渇いたから親父が水を汲んできてくれたんですけども，それをおいしいってガブガブと飲んだら，「あまり飲むな」って言うわけです．その当時は防火用水を各町内に用意しろと言われててそれを汲んできたんですが，そこにはボーフラがいるかもしれない．まあ3月だからいなかったのかもしれんけどまあきれいではない．その水を飲んだ．それから目が開けられなかったですね．たぶん煙でやられたんでしょう．しばらくしてやっと開くようになったら白い太陽が見えました．まだ地面は燻ってたから．それで周りを見ると目の前の川に死体が浮いてるし，ちょっと町を歩くと黒い焼死体をたーくさん見ました．川に浮いた死体は長い棒で引っ掛けて持ち上げてトラックに積んでいましたね．近くの駅はコンクリートだっていうんでそこにみんな逃げたんでしょう．そこでも山なりに人が亡くなってました．駅の壁に人の死体の油痕がついて，その死体の臭いっていうのは嫌なもんでね．その後10年間くらいそこを通るとその匂いを感じました．非常に嫌だった．

高橋：先生のご家族も皆さんご無事だったんでしょうか？

日江井：家族はみんな無事だったんですが，親戚の人が亡くなってね，大変だったですね．

高橋：学校のお友達とかも….

日江井：亡くなりましたよ．亡くなりましたね．かわいそうなのは，その数日前，3月8日かな．学童疎開で山形の方に疎開してた子達が，受験のために戻って来たんですね．彼らは小学6年生．戻って来て空襲に会って，亡くなっちゃった人がいるんですよね．数日後に帰京したら生きてられたんでしょうけど．そんなことがあってね．

●終戦

日江井：まあそれで中学2年になって，日本が負けたわけですよね．あの天皇の放送っていうのが，初めはよくわからなかったですけど，日本が負けたと親から聞きました．それまで家の中では空襲警報だなんていうと，電球にこう黒い布かぶせて真っ暗にして，勉強もできなかったわけですけど，それができるようになった．まあ安堵感もあったし，解放感もあったね．

高橋：放送はどこでお聞きになったんですか？

日江井：家ですね．学校で家へ帰って聞くようにと言われてね，家へ帰った．その放送の後，すぐ近くの友達が来たんです．私そのとき市川にいたんですけどね，市川の土手で太陽の沈むのを見て，まっかっかでね．私は覚えてないんですが，友達が「お前はあのときに気がふれたように『太陽が赤いなあ，まっかっかだなあ』なんて言ってた」というのを言ってくれたんです．

高橋：終戦の日の夕日を見たんですね．

日江井：それから前の話に戻りますけど，小学校2年生のときの担任の先生が，「君は小学校2年の作文で『太陽』っていうのを書いてるよ」と．私は全然覚えてないのに先生が覚えててね．内容を知りたいんだけどそれは燃えちゃったから何を書いたんだかわかんない．私はずっと太陽の研究をやってきたけれども，太陽をやりたいから太陽に行ったんじゃなくて，なんかそうやって太陽に惹かれていったんじゃないかしらと思うことがあるんですね．

高橋：自然と太陽に惹かれていったんですね．原爆についてはニュースとかで聞きましたか？

日江井：原爆はねぇ，わかんなかったです．だけどすごい爆弾が広島に落ちたよっていうのは周りから聞いた．それは中学2年だよね．原子爆弾だっていうのはその頃はわかりませんでした．

それで戦争に負けたときのね，先生の態度や社会の空気がその前日と全然違ったのにさ，びっくりしたわけですよ．もうねぇ，大人の言うこと，世間で言われていることは何を信用していいのかわからないと思った，そのとき．

高橋：終戦を境に先生の態度がガラッと変わったということですか．

日江井：変わりましたよね（笑）．そりゃあねえ，突然，民主主義だよ，自由だよとかね．なんか急に変わりましたね．

高橋：教科書を墨で塗ったりしましたか？

日江井：ああ塗った．よく覚えてる．何ページの何行目から何行目まで墨で塗れっていうわけです．それで塗るわけですよ．だけど塗る前にそこになんて書いてあるかと見るから，かえってそれはよく読みましたよ（笑）．

高橋：それはやっぱり戦争に関するところとかですか？

日江井：なんでしょうねぇ．鬼畜米英だとかね．鬼畜米英というのは実は小学校の頃に聞いてね．小学校の先生が言うには「彼らは毛むくじゃらだよ」と．確かに写真を見ると体が毛むくじゃら．それで「赤ら顔してるよ，風呂に入らないよ」って．だから鬼畜米英っていうともう鬼のようで不潔なんだなぁなんて思っちゃったの．でも後になってアメリカに行ったら彼らはシャワーを浴びて身ぎれいにしてるんですよね．だからね，それはこちらの理解の仕方がいけなかったんですね．まあ確かに風呂には入らないかもしれないよ．風呂には入らないけどもシャワーに入るとはそのころ気がつかなかったですからね（笑）．だから人の言うことで，何が本当で何が本当でないのかっていうのは難しいなと思ったですね，子供心にね．

でも，尊敬する先生もいた．もう戦争中は戦争反対なんて言えないですよね．言ったら大変だから．でもその先生は戦争反対とは言わないけども，戦争は大丈夫かなと思ってるんだなぁというのが子供心にわかるわけですね．そういう先生が終戦後によく教えてくれましたよね．そういう先生は僕らも尊敬してましたね．「あの先生の授業はいいよ」とかね．

高橋：気骨のある先生もいらっしゃったんですね．

日江井：いた．いましたよ．だけどそういう戦時中の時代に流れていた思いというのはねぇ，大人になるとなかなか元に戻せないですね．私はまだ子供で柔軟性があったからね．中学2年，13か14かそこらへんだからまだ柔軟に対応できたのかもしれないけど，大人は大変だよね．人間って保守的だからつい解析接続をしていくじゃないで

すか，個人的には．だけど国家は解析接続できないのね．負けたんだから．だから大人は大変だったに違いないと思いますよ．学校教育も変わったわけだよ．6・3・3・4でしょう．文部省は教育の枠組をどうするか，教育をする先生をどうするか，校舎はどうするか，とかいうのに悩んだに違いないですよね．

高橋：そうですね．急にいろいろと変わっていくわけですよね．戦中と終戦後と食料がなくなってくると思うんですけど，いかがでしたか？

日江井：戦争中は何とか食べ物はあった．戦後ですよ，大変だったのは．家は燃えちゃって商売ができなくなったからね．母親は本当にずいぶん苦労したに違いないと思いますね．それこそタケノコ生活で，着物を売っちゃあお米と換えたんじゃないかなぁと思います．

高橋：街に占領軍はいましたか？

日江井：ああ，負けたときには占領軍が来てびっくりした．当時彼らをGIと呼んでましたけども，体格がよくてね．それでねぇ，街へ行くと十字路の交差点で，GIと日本の警察官が立って，信号機の代わりをしているんですよ．占領軍がこう非常にかっこよくてね，そのそばに日本人がいるんですけど，日本人はやっぱり体格が悪かったですよね．ああアメリカ軍はすごいなぁ，ああいうのに負けたのかなぁってね．

高橋：怖くはないんですか？

日江井：怖いとは思わなかった．負ける前はいろんな噂が飛びましたよ．女子はどっかへ逃げないと危ないという．でも私は怖いとは思わなかった．彼らはジープを乗り回していて，あっちこっち闊歩してましたからね．あんなのと戦争したんだからなぁと思いましたけどもね．

高橋：占領されてるっていう感じはあったんですか？

日江井：それはそうでしょうよ．教科書を黒く塗れだとか，手紙のコントロールもあったようですし，それから新聞の検閲もあったようですよね．マッカーサーがきて，飛行機から降りる写真なんかかっこいいのが出てね，天皇がマッカーサーのところに行ったじゃないですか．ああ日本は負けたんだなぁと．天皇が一番偉いと思ってたわけよね．それよりも偉い人がいるんだと思ってね．負けを実感しましたよね．

それよりも毎日の食べるものすら欠けて大変だったですからね．戦時中，戦時国債っていうのを父が買わされたんでしょうね．戦後にインフレが進んで新円切り替えだとかいってね，「こんな国債は紙屑だよ」なんて言って嘆いてたのをちらっと見てましたからね．いやあだからやっぱり負けたんだなぁと思いましたよね．あのう，GIは上手ですねぇ．小さい子に坊や坊やって，チューインガムやチョコレートをあげたりしてましたね．

高橋：ああ，先生ももらいましたか？

日江井：私はあんまりもらわなかった．でもそういうGIのアメリカ人ってのは明るくって人懐っこさそうだなと思った．アメリカ人は表面的には柔らかくしてね．一方，新聞なんか締めるところではちゃんと検閲やったりしてね．憎む相手という気が全然しなかったのは占領政策がうまかったからでしょうね．

高橋：ちょっと前まではアメリカ人というのは敵だったわけですよね．

日江井：まあそうだったんでしょうけれども，軍国教育というのはそれよりも「お国のために」とか，「生きて虜囚の辱を受けず」という話でした．そういう厳しくて，気持ちをがんじがらめにする言葉が頭に入っていたけれども，戦争が終わってこれからはもっと自由に動けるよっていう空気が広がったんで，敵を憎むというセンスではなかったですねぇ．私は戦争に行かされなかったからそう思ったのかもしれませんけどもね．日本人をたくさん殺した相手，沖縄での本当の生死の状況というのは伝わってこなくて，憎々しいという気は起こらなかったですね．

●戦後の中学校

高橋：では終戦を迎えて，その後は中学の授業もちゃんとやるようになったんですか？

日江井：授業をやるようになったけれども，教科書もろくになくてですね．今覚えてるのは，国語の先生がいい先生でね．その先生がですね，万葉集だとか源氏物語だとか，平家物語だとか奥の細道だとかね，最初のところだけを黒板に書くわけ．それを我々はノートに手書きして教科書としました．「祇園精舎の鐘の声」だとか，「月日は百代の過客にして」だとかですね，そういう最初の文だけは今でも覚えているわけですね．その先生は気骨のある先生だったんですね．

高橋：戦後すぐ，憲法ができますね．憲法については学校で何か説明があったんですか．

日江井：憲法を学んだという記憶はありませんね．というのも，軽蔑といっちゃあおかしいけども，あの先生の言うことは聞くまいと思った先生が社会という教科を教えだしたんですよ．それで私は社会の授業で「社会は複雑なので，授業にはなじみません」って先生に平気で言ったの．そしたら先生が，「じゃあお前は出て行って自分で好きな勉強をしろ」って言って教室から出された．だからもしかしたら憲法の話があったのかもしれません．私は憲法よりも軍事裁判の方を聞いて，辛かったですよね．

高橋：それもニュースで聞いたんですか？

日江井：ニュースで出ました．テレビなんかないから新聞ですよね，その頃．新聞で写真が出てね．それでインドのパールという判事ですか，その人が皆と違った意見を言ったっていうんで，ああインドっていうのはすごい国だなぁ，そういう人がいるんだなぁと思いました．

高橋：中学の後半は高校受験の勉強でしょうか．高校に入るのは戦後でまだ日本が落ち着く前ですかね．

日江井：そうです．落ち着く前だったなあ．ちょうど学制が変わったわけです．

中学3年生，一番右が日江井氏（日江井氏提供）．

高橋：高校受験はやっぱり大変でしたか？

日江井：そう．姉が亡くなってから，ああいう不条理はどうしようもないですよね．それを勉強に向けたっていうところから勉強しだしたなぁという気がします，今思うと．僕らのときにはアチーブメントテストっていうのがあったんですよ．理系と文系の問題が出ました．理系はできた．ところが文系はできなかったからね，だからやっぱり自分は文学的センスがなかったのかなぁという気がしましたね．

高橋：それで先生は理科系に．

日江井：理科系だったですね．でもその当時は化学の実験だとか何にもない，実験は何にもできなかったですよ．

高橋：アチーブメントテストっていうのはみんな共通で受けたんですか？

日江井：共通で受けたんです．そのときは中学校4年と5年が旧制高校入試を受けられたから，4年生と5年生と一緒に全員が受けさせられたですね．

高橋：先生は4年で修了されたんですね．

日江井：そうです，4年で．

高橋：いわゆる4修5卒っていう．

日江井：そうです．そのときだったですね．

高橋：4年生で修了できる人はそんなにいないわけですよね．

日江井：中学で10人くらいいたかな．

高橋：大部分は5年生で卒業すると．

日江井：そうです，そうです．それで中学4年生で修了した人の大部分は新制高校2年生になったんですが，私は旧制高校の1年生になった．

高橋：そうなんですか，ええと，中学5年生まで行った人は？

日江井：5年生で卒業した人は，新制高校の3年生になる．

高橋：ああ，そうなんですね．

日江井：難しいんだよ．

高橋：ちょうど旧制と新制が切り替わるところだったんですね．じゃあ先生は中学を4年生で修了して，旧制高校の1年生になったわけですね．

日江井：そうですね．

高橋：戦後の頃はかなり食糧が厳しかったっていうことで，その中で苦労して勉強されて．

日江井：ああ，食料は厳しかったですね．本当に食うや食わずだった．ひもじい思いをしてね，親友が筑波に引っ越して，「俺のところに遊びに来いよ」って言うから筑波に行ってですね，帰りにお米をもらって帰るんですよね．下手に持ってくるとおまわりさんに捕まっちゃうわけです．だから少しもらってきてね，白米が食べられるっていうのはうれしかった．ちょうど中学生だから食い盛りだったわけですよね．食料不足だから私，栄養失調になったらしくてですね，脚気になっちゃったんですね．だからたぶん栄養失調だったんでしょうね．

高橋：じゃあそういう中で勉強をしてっていう．

日江井：勉強をしたんです．それからあの頃は停電がしょっちゅう起こった．でも停電が起こってもね，誰かが教えてくれたのかもしれませんけど，1つの線をつなぎかえるとね，薄暗いけれども電気がぼーとつくんですよ．

高橋：え，そうなんですか．

日江井：それで勉強しましたよ．暗ーいところで勉強，それで目を悪くしたのかもしれないですけどね．しょっちゅう停電が起こって暗い中で勉強をしました．それでね，山手線に乗ればずうっと明かりがついてるからね，山手線に乗って本を読んだこともある．

高橋：ええっ，そうなんですか．

日江井：うん，あるある．勉強が好きだったというか，いや，勉強しかすることなかったですよね．その当時は遊ぶことなんかほとんどなかったですもん．食い物はないしね．

（第2回に続く）

謝　辞

本活動は天文学振興財団からの助成を受けています．

A Long Interview with Prof. Eijiro Hiei [1]

Keitaro Takahashi

Faculty of Advanced Science and Technology, Kumamoto University, 2–39–1 Kurokami, Kumamoto 860–8555, Japan

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Eijiro Hiei. He studied under the guidance of Prof. Yusuke Hagihara. Prof. Masaki Kaburagi, and Prof. Yoshio Fujita in the Department of Astronomy at the University of Tokyo. After graduating the University of Tokyo, he worked on solar physics at Tokyo Astronomical Observatory of Japan, where he had observed solar flares at Einstein Tower telescope with Prof. Zenzaburo Suemoto. Then he served as the director of the Norikura Solar Observatory at the Tokyo Astronomical Observatory and played a leading role in the solar observation satellite “Yohkoh”, significantly advancing solar research in Japan. After retiring from the National Astronomical Observatory of Japan, he joined Meisei University, where he dedicated himself to astronomy education and even served as the university president. Moreover, Prof. Hiei has observed numerous solar eclipses over several decades. He describes himself as being afflicted with “eclipse fever”, a term he uses to describe being captivated by the allure of solar eclipses. This time, he shares his experiences from his junior high school days, including surviving the Tokyo Great Air Raid and witnessing the end of World War II. How did these experiences during his formative years as a junior high school student influence him?